

災害時に必要とされる教員や保育士の資質能力とは

ー熊本地震被災地での教員・保育士の取り組みを見つめてー

森 晴美

1. はじめに

平成28年4月14日、幼稚園や学校では新学期が始まって約1週間が経ち、子どもや教員・保育士、そして保護者は、それぞれに新しい始まりに大きな期待を寄せていたことだろう。午後9時26分に熊本地方を襲ったマグニチュード6.5の大地震は、翌日の夜明けとともに被害状況が徐々に明らかになり、テレビでの情報番組やネット配信ニュース、そして新聞やラジオなどで伝えられた。誰もがその被害の深刻さに心を痛めていただろう。特に、教育・保育関係者は「熊本の子どもたち、先生たち、新学期が始まっただけでも大変なのに」と、その時点ではなかなか報道されない最前線の学校園や保育所に心配が尽きなかったのではないかと推測する。

本学で筆者が担当する教職概論の第1回目の授業は、「先生になりたい」という将来の夢について話し合ったり、過去の記憶をたどりながら自分が出会った「先生」について振り返ったりしており、「先生」を目指す意欲に満ちた時間であった。第2回目の授業では、熊本に2回目の地震である本震が発生し、更なる被害の状況と避難所の状況が報道されていた。学生たちは、「先生と子どもがやっと出会ったばかりの時期に、このような災害が起きるなんて」「悲惨…」などと話し、大変な状況は分かるが、自分にとっての現実味がないことを素直に言葉に表していた。これから教員や保育士を目指す学生として、このような災害時にも使命感をもち様々な任務を必死で遂行している教員や保育士のことを、今知り、学び合うことの必要性を感じた。

2. 研究の目的

学校における教育活動が、安全な環境において実施され、また児童生徒等の安全の確保が図られるように「学校保健安全法」に基づいて、平成24年4月に「学校安全の推進に関する計画」が閣議決定された。この計画は、その後平成28年度までの5年間にわたって、安全に係る取組が確実かつ効果的に実施されるための指針として策定されたものである。

その後、平成28年4月18日付「第二次学校安全の推進に関する計画の策定について」において、防犯・安全教育に関する事項を除く諮問理由が次のように記載されている。①防災教育の重要性が高まり、先進的な取り組みが進められた地域や学校がある一方で、十分な取り組みが進まないという温度差が生じていること、②平成23年東日本大震災を含め震災の記憶が風化して取り組みの優先順位が低下していることへの危惧、③今後発生が懸念されている首都直下型地震や南海トラフ巨大地震等に対して児童生徒等の命を守るための対策が喫緊の課題となっていること、④災害時に学校が避難所になった場合を含め、日常的に学校や教職員と関係機関や地域の人々との役割分担連携が重要であること、⑤教職員自身が自然災害等の安全に関する知見などの指導すべき内容を明確に把握することの重要性、などである¹⁾。災害が複合し、想定外の状況にも対応できるしくみを構築する必要性が迫っていることが読み取れる。

筆者は阪神淡路大震災の激震地域で被災し、避難所からA市立幼稚園教員として勤務を続けた経験がある。また、東日本大震災が発生した当時勤務していたB市立幼稚園では、地震想定

の避難訓練を大幅に見直し危機感を抱いた。「想定」は何をどこまで想定すればよいのか、非常に難しくまた、幼児を連れて長距離の避難誘導は危険であり不安を感じた。特に B 幼稚園は、海拔 2m 河口から約 300m と海に近く、園舎は 1 階平屋建てであった。従来ならば近隣の集合住宅や小学校屋上への垂直避難ができるものと想定しており、地域との連携も密に園経営が推進されていた。しかし、その地域も待機児童対策や人口増加により保育所が増設され、避難場所・避難所の取り合いの危惧もはらんでいた。早く避難所に到着できなければ、幼児を連れてそのまま動けなくなる可能性もでてきたのである。

「やはり、水平避難も考えた方がよいのではないか」と、地域との協議の中で意見が出た中、小学校区内の保育所と地域の有志の方と一緒に地震後の津波を想定して小学校 4 階に集合する訓練を行った。その結果、4 階講堂は当時 1,000 人を越える小学校児童に加え、校区内の幼稚園と保育所の幼児と教職員、そして地域の人たちであふれ、児童は整列して立ったまま、幼児は床にひざを抱えて整列して座ったままで、一步も身動きができない状態となった。エレベーターを使わず、外部の非常階段と校舎内の通常使用の階段のみを使った垂直移動はかなりの時間を要した。また、4 階にたどり着いても、次々と階段を上がって来る人たちに迫られ、幼児の緊張や不安感は相当な強さであり、幼児にとって理解しがたい状況となった。人の密度の濃い避難所は第二次災害も引き起こす可能性があり、「動ける人は高度のある別の場所へ動いた方がよい」と可能な限りの水平避難を園児にも暗に求められた。

この結果を受けて、園では協議を重ね新たな避難場所を再検討し、教員の支えを得ながら幼児一人一人が安全な場所を目指して自力でたどりつこうとする力を養うことが急務となった。日々の遊びに、駆け足や障害物を避けて動くなど運動能力をさらに向上させる要素を園内外の場所を問わず取り入れた。また、園外保育では

地域の特徴や目印を知り、具体的なイメージとともに覚えるような意図的な助言をするようにした。そして、実際に海を背に、主要幹線道路を越えて、比較的安全とされる海拔 10m の公園まで約 700m、坂道を小走りで移動する実地訓練を行った。反省会では、園外保育の誘導と違い、幼児を励まし続けながら連続する坂道をあきらめずに移動することの大変さを痛感した。山と海の距離が近い B 市の地形において、海から逃げることは、急な坂道を山に向かって上がり続けることである。教職員だけでは、かなり難しいと実感した。

現在、グローバル化や情報化社会に対応するべく、教員や保育士に期待される資質能力は高まる一方であるが、改めて児童生徒らの命を守ることを意味を過去の災害からも学び、災害後の教員や保育士がどのように被災地で過ごしているのかを、この熊本地震から学生とともに見取りたいと考えた。本研究では、学生自身が震災後の熊本の学校園に関する情報収集と考察を通して見出す内容に着目し、先行文献を参考に、災害時にも有効な教員や保育士の資質能力について明らかにしていきたい。

3. 研究の方法

①研究対象

教職概論履修 1 年次生 52 名

演習Ⅲ履修 4 年次生 10 名

②研究方法

1 年次生には熊本地震関連の情報の中から教員や保育士に関する記事を選択し、考察シートに記入したり、発表の機会をもたせたりした。その後質問紙による調査を行った。4 年次生には「人と防災未来センター」に引率し見学後質問紙による調査を行った。

③調査期間 平成 28 年

1 年次生 4 月 18 日～7 月 25 日

4 年次生 7 月 5 日～8 月 5 日

④分析方法

考察内容に関しては、研究テーマに沿うキ

ワードを抽出しコード化後、概念化した。

4. 結果と考察

(1) 熊本地震関連の様々な情報の中から、教員や保育士に関する記事を検索し、その職務の様子を把握する学習の結果について

①4月14日～4月25日までの調査

⑦「先生のこと、あまり載っていないです」

この期間は、日々明らかになる被害の状況を伝える内容や避難所の様子を伝える内容が主であったため、学生たちは教員や保育士の様子を知る記事を探すことに手間取っていた。しかし、公共の避難所が避難してきた人でいっぱいになり、狭い幼稚園や保育所も避難所になっている場面や、学校の先生がジャージ姿でマットを運び出している様子をニュースの画面で一瞬見られたことなどから、公になりにくい先生のことを察するようになった。災害時には、管理職以外は教育や保育の職務から離れることができると素直に考えていた学生もいた。授業の中では、これから詳しくその職務について学ぶところではあるが、命を守り支える側としての先生の姿がイメージしにくいことが明らかになった。「守られる側から守る側へ」「教えられる者(学生)から教える者(教員や保育士)へ」と、その立場が逆転する職業でもあり、学生の戸惑いや誤解は十分に理解できるものである。

⑧「兵庫って、すごい。いつの間に助けに行ってたんやろう」

少ない情報の中で EARTH(兵庫県教職員による震災・学校支援チーム)が現地泊まり込みで派遣され、阪神淡路大震災の経験を生かして様々な支援を行っていたことに関する学生の報告があり、兵庫県の粘り強く迅速な取り組みに驚いていた。EARTHは、避難所となった学校の運営にかかわりながら、幼児・児童の教育再開の準備に迫られる教師の負担をどう軽減するか、授業の再開の在り方にどのような見通しをつけるか、現場が必要としている課題と解決の

糸口になる専門家をどのようにつないでいくか、などの様々な役割をこなしている。記事として掲載されたのは遅かったが、学生の発表の中で、迅速に対応して現場の教職員を直接励まし支援していたことを分かり合えた。20年以上経過してもなお震災の経験を生かし、教育における復旧を支えようとする兵庫県の取り組みを見つけた学生は驚き、感動していた。

⑨「保育園って、学校より早く再開している」

園長独自の判断により、保育園を開園して親を支えたり、子どもたちに元気を取り戻すための取り組みを工夫したりしている情報を捉えた学生も多かった。さらに、落ち着いた幼児への環境的な工夫をしていたり、他世代の他人とも一緒に遊べる創造的な保育を行ったりして、ストレスを緩和させる遊びの工夫をしているなどの発表も増えた。自らが被災者である保育士たちが、子どものこと、親のこと、避難している人が少しでも元気を取り戻せるようにあらゆる努力している姿にふれ、心を動かされていた。避難している時に有効な遊びは、普段でも十分楽しめる遊びである。今回学生が見出した記事からは、避難初期に有効な遊びは次の通りである。a「周囲のストレス増加につながらない遊びと遊び方」b「避難所にいる他世代の人の心も癒す遊び」c「他世代の人と子どもがつながることのできる遊び」d「子どもの心を開放し元気を取り戻す遊び」e「子ども同士でも誰かのために自分の力を活かせるお手伝い遊び(例:赤ちゃんのお守り)」f「誰にも干渉されなくて落ち着ける(小さな)空間での遊び」これらの遊びを幼児の発達や限られた遊び環境の中で、具体的に何をどのように行ったのかを知ることが今後の課題となる。遊びを通して、子どもの笑顔を見られることの効果や、つながりを得るとともに生きることの大切さについて記事を通して知ると同時に、環境に応じて遊びや活動を創造できる能力の必要性を見出していた。

②4月26日から6月21日までの調査

⑦前回の調査と比較して分かったこと(表1)

「支援のレベルが変わっている」「疲れている」

被災初期は、ライフラインの復旧に日夜追われるが、約1カ月経過すると道路や下水道などの使用が不完全であっても一部使用可能となり、支援のレベルが変わっていた。いわゆる、間接支援から助けてほしい人たちが被災地に入って来て様々な支援を行う直接支援に変わり、復旧が日ごとに早くなっていることを見出していた。

また、「家に戻れない」「元通りの生活が営めない」という場合、避難所での長期の生活を余儀なくされることから、プライバシーのない不慣れた生活や疲労が心身に表れ始めていたことも、この期間の記事の特徴として見出していた。

表1は学生が前回の調査との違いを見付けた内容である。避難生活の長期化から不安やストレスが継続し、大人も子どもも心のケアを必要としていた。学校では、子どもたち一人一人に調査を行い、実態を深く把握し必要に応じてカウンセリングを受けられるようにしていた。また乳幼児をもつ保護者には短時間であっても、「預かり保育」が利用できるようにし、少しでも子どもと離れて親自身を開放できるようにしていた。余震も多い中、親と子どもと離れることに関して様々な考え方がある中で、思い通りに暮らせない限られた空間での子育ては、相当な負担と周囲の人への気遣いなどで、疲労感の大きいものであることを察することができた。

「親が倒れると、子どもも共倒れになる」それを防ぎ、広い場所で、先生や友達とはしゃいで遊ぶことができる子どもらしい生活を保障する意味で、被災後初期の子育て支援は、改めて貴重な取り組みであることが分かった。

災害時の子育て支援には、通常以上のマンパワーと専門性を要する。しかし、被災地でボランティアをしようと保育士が行動を起こしたところ、勤務先から保育士は乳幼児の定数に即して配置されるのであり、そのような行動をされると勤務先の保育に支障が出て基準を満たせな

いから自粛してほしいという新たな課題も明らかになった。「助けてほしいのに、助けに行けない」という保育士たちの思いは、同じ仲間としてさぞ悔しいことであったと思う。「気持ちはわかるが勝手に行かせられない」という事業所の苦しい事情も否めない。国内では、保育士不足が言われて久しいが、このような緊急の場面で、近隣都市だから積極的に援助しようと思っても行動を起こせない事情は、今後の災害時の支援の在り方を考える上で改善しなければならないことと考える。

一方、幼稚園でも預かり保育を早期に実施し、避難所から通勤しようとする保護者を支援したり園庭開放事業などを行ったりしていたが、保育士の配置のような問題は当時の記事を探す限り起きていない。乳児保育がないということ、長時間保育ではないということ、など幼稚園の設置基準や果たすべき役割と機能との違いが表面化した。今後、認定子ども園の増加が見込まれる中で、災害時にも弾力的な運営や「保育教諭」の配置により有効に活用できるしくみを構築することが望まれる。

(表1) *延べ25件

前回の調査との比較	数
復旧が始まり前進している	5
生活の場が落ち着かない人が多い	3
子どもも大人も心のケアが必要	3
子どもの心を調査、把握している	2
避難者同士の助け合いが大変	2
発達障害の人が対応困難になっている	1
学校の再開と給食の問題が急務	1
アースは第三次派遣されていた	1
保護者が周囲を気にしている	1
ストレスを与えない遊びが重要	1
子どもを預け保護者が安心している	1
校長は全てを把握し大変である	1
試行錯誤の連続で授業を工夫している	1
お知らせが写真入りで分かりやすい	1
教員や保育士が疲れている	1

④第2回目の調査を通して自分の目指す教職・保育職ではどのような資質能力が必要だと感じたか。(表2)

被災地では、生活環境が急変したり、避難所での生活が続いたりして、被災した人々の心がさらに追い詰められていた。国や行政は、心のケアのために臨床心理士やカウンセラーなどの専門家につなぐための予算配置などを協議していた。²しかし、学生は専門家を待つのではなく、そばにいる教員や保育士が子どもの心に寄り添い、負担を和らげる技術を少しでも習得していた方がよい、と考えていた。子どもの心の問題は、待ってられないという緊迫した状況が情報の中に多く見受けられ、そのように感じたのであろう。

また、学生は「しんどい子どもたち」の記事の多さにも着目していた。被災後の子どもたちは、様々な現実を受け入れ始め、環境の変化に無理やり合わせられた結果、次のような症状を表していた。a 夜泣きや癇癩、きょうだい喧嘩の増加 b 暴言の増加 c 頭痛や腹痛などの身体の異変 d 涙があふれる e 睡眠不足や車中睡眠へのこだわり f 物音への怯え g 赤ちゃん返り h 平然を装ったりやせ我慢をする i 危機対処能力の低下、などであった。このような子どもたちの苦しみは、家族の苦しみでもあることから、親子ともにケアする必要性が学生にも理解された。

被災後1カ月の時期は経済的な支援が始まり、保育所や幼稚園では預かり保育や保育料の減免措置が行われ³、乳幼児を預かる試みが拡大した時期でもあった。しかし、ライフラインの復旧が十分ではなかったため、衛生問題が解決できず給食の提供ができなかったり、半日保育を行ったりしていた。水の確保が困難なため、哺乳瓶の消毒ができず、緊急輸入した海外製品の液体ミルク活用するという新しい試みを行っていた保育所の実践もあり、乳児の命をつなぐ方法について、また乳児とともに避難している保護者の思いについて⁴、更なる学びが必要だと感じた。

学校の再開の見通しがつき、その日を心待ちにしていた子どもたちは、学校再開に向けて教職員と一緒に掃除の手伝いをしている様子が伝えられた。避難所でもある小学校では、教室が十分に使えず、体育館を簡易的な間仕切りで学習を再開していた。隣の声が聞こえる中での授業はさらなる課題となり、机の並べ方を工夫したり、受験期の生徒はできるだけ集中できる場所を確保したりするなどの工夫や改善がなされていた。

このような状況を知る中で、学生は表2のような資質能力が必要だと見出した。上位は「心のケアができること」「忍耐力、自ら道を切り開く力」「冷静で客観的な判断力と決断力」であった。災害時の教員・保育士の厳しい現状からは、その使命感に基づき心に寄り添い、現状を切り開く忍耐と行動力が重要であると見出している。特に、避難所となった小学校の教員は、授業を再開しつつ、避難している人々の世話にも携わっていた。夜間は、避難者の飲酒や徘徊などの状況に対応したり、汚物の掃除、マットやラジカセなどの運び込みをしたり、分かりやすい写真入りのお知らせの作成や掲示をしたりなど、多岐に渡っていた。雑務が押し寄せる中で、ある学校では全教職員を大臣に見立てて役割分担を決めて、学校運営を行っていた。混乱を防ぎ、道筋を作って作業が重複しないよう、限られた人員が連携をとり必要な支援を迅速につなぐ工夫をしていた。これらは、対策マニュアルだけでは対応できないその現場ならではの課題解決に導く力である。

その他の資質能力においては、普段から子どもの変化に気付くための観察力や洞察力、笑顔や思いやりなどを示すことができるあたたかい人間性、危機管理意識を高め対策を熟知していることやコミュニケーション能力などが必要であると見出している。

前回の調査時期では、「少しでも楽しく、元気を取り戻す」試みが多く取り上げられていたのに対し、今回はそれぞれの職場で子どもや保

護者、避難している人々に真摯に向き合い、最善策を試行錯誤して探し出そうとする教員や保育士の様子が明確になった。地震だけではなく、夏に向かう暑さや大雨などのその後の悪天候により、要求される援助が変わり、被災地の状況は刻々と変化し続けていた。その変化についていけない人たちも増加した。特別なニーズを要する子どもやおとな、免疫の弱い乳幼児や高齢者。そのような様々な人が身を寄せ合う学校園や保育所は、緊急時の居場所としても重要であることを痛感していた。それは、信頼を寄せられる身近な先生が存在して、守ってくれるという安心感があるからではないだろうか。

(表 2) *延べ 79 件

災害時にも必要な教員や保育士の資質能力	数
子どもに寄り添い心のケアができる	25
次々と発生する課題や問題にあきらめない気持ち、忍耐力、自ら道を切り開く力	15
冷静で客観的な判断力と決断力	10
思いやり、小さな心がけ、温かい気持ち 笑顔	4
心理学の学び	3
学校園を再開する力	3
対策マニュアルの知識・危機管理意識	3
地域や教員との団結力や協力	3
日常も災害時も変化に気付く洞察力、観察力	3
一般知識	2
日々の避難訓練を工夫する	1
遊びをストレスケアに変える知識と力	1
当たり前が大事という気持ち	1
自然災害を知る	1
怪我に対する応急処置	1
伝える力	1
子どもをまとめ指導する力	1
様々な場所で働く環境適応能力	1

㊦この課題を通して、教員や保育士の職務に関する意識の変化について(表 3)

*調査は教職概論最終回で行った

(表 3)

意識の変化	人	%
とても変わった	16	34.8
変わった	18	39.1
あまり変わらない	11	24.0
変わらない	1	2.1
合計	46	100

この調査を通して教員や保育士に対する意識の変化を尋ねたところ、表 3 の通りとなった。「とても変わった」「変わった」を合わせると 73.9%であった。継続して注視し、意見交換や発表を通して、教員や保育士の職務や使命感について具体的にイメージし知ることができたと考える。一方で「あまり変わらない」「変わらない」と答えた学生は、その理由を「教師はそのような仕事だと覚悟している」「教師は災害時も教師だから」と述べ、自分で目指す職業を決めた際にそのリスク面も考えていた。大切なことは一人の教員・保育士がすべての資質能力を持ち合わせるのではなく、協力すること、知恵を出し合うこと、など協働し、つながり合うことで最大限の力を発揮することである。そのことも、記事から読み取ることができた。幸いにも、この調査を通して、将来教職・保育職に就くことをためらった学生はおらず、逆に励まされ、共にたくましく生きる意味や自分ができる支援について学ぶ機会となった。小原・谷口は、教員養成課程において、防災教育が教職課程で充実しているとは言えないこと、また、学校現場に就く教員養成課程の学生対象の調査が少ないことを指摘している⁵。学生の防災・減災に対する意識変容につながる教育方法を今後も探っていく必要がある。

㊧阪神淡路大震災と東北大震災のどちらを身近に感じますか。

1年次生は、中学生の時に東北大震災があったことを知っている。そして、その映像も見たり聞いたりして、間接的ではあるが自分の記憶に残る災害の記憶をもっている。しかし、実際に尋ねたところ、自分が見聞きした東北大震災の記憶よりも、1年次生が生まれていない時に起きた阪神淡路大震災が69.2%、東北大震災が30.8%と、身近に感じる度合いに違いが表れた。

この結果は、自分たちが今住んでいる場所で過去に大きな災害が起こり、人々が苦労して復旧・復興への道のりを歩んできたということ学習する積み重ねがあったからではないかと推測する。

東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議(第1回)の議事録⁶によると、東日本大震災の被災地では過去にも津波を伴う大地震があり、地域で伝承がなされていたところは被害の規模が結果的に縮小になっていると報告され、「語り継ぐ」ことの重要性について強調されている。その議事録には、昭和8年の大津波の被害を仙台の校長先生のほとんどが知らなかったことに驚き、これが語り継がれていたら随分意識が変わっていたのではと記録されている。

学校園の教員や保育士は転勤しながらキャリアを積むことがある。そのような場合は特に校区・園区に限らず、もう少し広域でその地域の歴史や伝承を知ることが欠かせないだろう。教員や保育士は、その教育・保育の中で語り継ぐ伝承者としての役割も重要である。学習や遊びの機会を通して、地域の歩みを知らせると同時に未来への展望を子どもたちとともに開いていくことは、防災だけではなく幅広い教育の中に浸透させることができると考える。

(2)「人と防災未来センター」での防災研修

筆者の担当する4年次生は全員が保育・教職志望であり、卒業後すぐに担任となる可能性が高いことから防災・減災の視点をもった保育運営をねらい学外授業を行った。展示物の見学以

外にも、館内でボランティアの方々による震災当時の記憶や語りを聞いたり、東北大震災の津波が到達したその高さを体感したりした。

①阪神淡路大震災が起きた時のあなたや家族の様子を知っていますか。

4年次生は出生前が4名、生後9カ月までの乳児であった学生が6名であった。出生後間もなく阪神淡路大震災に遭い、保護者が大変な苦労の中で子育てをしていたことが伺えた。中には、里帰り出産で、兵庫県外にいたため被災後の混乱から免れた学生が3名いた。記述内容からは「自分が粉ミルクを飲んで育ててもらっていたため、水の確保に苦労していたという話を聞いた」「知り合いから公園の水を分けてもらい、その濁った水をコーヒーマーカーで濾してミルクを作ってくれた」「赤ちゃんがいるから、と同じマンションの人に水を分けてもらっていた」と、揺れの恐怖や損害よりも「水」を手に入れる苦労が親からは強く伝承されていることが分かった。また、水の確保に多くの人の協力が必要であり、被災者同士で緊急を要する家族を優先して命をつなぐ支援があったということに気づき、感謝の気持ちを新たにすると同時に「共助」の精神をもつ大切さを学んだ。

②「人と防災未来センター」を見学して新たに分かったことは何ですか。(表4)

(表4) *延べ13件

見学後 新たに分かった内容	数
被災された方の苦労	7
被害の詳しい状況	3
予想される地震と被害の想定	2
世界の災害にも目を向けられた	1

表4のとおり、今までの成長過程の中で学んできたことと照らし合わせながら、大学生の今新たに分かったことでは、「被災された方の苦労」が半数以上挙げられた。館内では、震災語り部の方が、当時のことを学生に分かり易く伝

えてくださったり、教訓を生かして力強く生きてほしいという願いを込めて接して下さったりした。さらに、当時の様々な展示物や資料を通して、悲しみや辛さが共感できたようであった。何も語らない当時のありのままの物品は時間が止まったような感覚とともに、「テレビの映像以上に残酷で心が痛くなった」「復興までの道のりを少し軽く考えていた」「ニュースや新聞報道などを活用して震災のことを勉強したが、被災者のその後の暮らしについての手紙や記録では、何が苦しく大変なことであるかが具体的に分かった」などと、人の命のはかなさ、当たり前前のことが当たり前でなくなるのが現実にあるということを読み取っていた。

また、「予想される地震と被害の想定」については、「今の予測(津波到達までの時間がわずかであること)のイメージが具体的に分かり、本当に怖い」「逃げられるのか」という不安や疑問を抱いていた。だからこそ、「防災・減災」の意識をもって行動を開始することが大切なのであり⁷、最新の情報を得て対策することで、不安感を少しでも解消できる保育や日常生活を送るよう意識を高めなければならない。

③防災の視点から、教員や保育士に必要な資質能力は何ですか。(表5)

(表5) *延べ38件

教員や保育士に必要な資質能力	数
過去の地震と対応を学び伝える	8
子どもの安全優先し信頼関係を築く	7
定期的な避難訓練・備え(防災バッグ等)	7
慌てない・冷静な対応ができる	4
職員間での共通理解・同じ意識をもつ	3
子どもの実態(住所・個性)の把握する	3
子どもを抱えて走る体力をもつ	2
子どもたちの防災意識を高める	2
子どもが安心できる言葉がけができる	1
家庭や地域との連携ができる	1

4年次生は、自分たちが家族や学校園から阪神淡路大震災のことを伝承されて育っている経緯があり、このたびの研修において過去を知り現在・未来に生かすことを重要視していた。それは、まもなく教職・保育職に就職することで、子どもの命をどう守るか、どう備えるかということが間近に迫っているという意識や責任感が芽生えているからであろう。日常の保育や訓練の一工夫で、様々な危機に対する能力を高めることができることも今回の研修を通して学んでいる。幼児や保護者との信頼関係を築き、どのような時も不安を与えないで冷静に対応することができるよう心掛けたいと考えていた。

④この施設見学などを通してあなた自身の課題は何だと考えますか。(表6)

表6では、1位は防災・減災への取り組みを学習し推進することであった。今回の研修では、地震関連の災害の具体的な被害の状況やその後の人々の暮らしに触れることで、減らせる災害があるということを学んだ結果であると考えられる。災害そのものを「防ぐ」ことが個人的には難しくても被害を「減らす」ことの価値を見出すことができたとも言える。

内閣府では、減災の意味を「災害後の対応よりも事前の対応を重視し、できることから計画的に取り組んで、少しでも被害の軽減を図るようにすること」としている⁸。その「減らせる」部分について意識を高く持ち、それぞれの職場で学ぶ必要を見出した結果だろう。

また、阪神淡路大震災の際には、近所の人同士、あるいは様々な思いのつながりを見付けた者同士での「共助」が欠かせなかったように、「連携する力」が必要であると感じている。「連携する力」は、様々な場面でも必要な資質能力であり、課題解決に迅速性をもって迫るには欠かせない。特に、災害後には時間の経過とともに、様々な課題や問題が発生し対応に追われがちになる。普段から様々な立場の人を知り、自分の力を生かす経験を積むことが「連携する力」

の育成に役立つと考える。

保育の現場では、0歳児から職員とともに避難訓練に参加している。2歳児後半では「先生と一緒に移動して避難する」という「自分の命は自分で守る」つまり「自助」の大切さについて行動を通して学び始める。子どもたちが「先生と一緒になら安心して逃げられる」という気持ちを持ち、意欲をできるだけ維持できる指導や援助の在り方を実践から学ぶことが大切である。

(表 6) *延べ 30 件

あなたの今後の課題	数
防災・減災の取り組み(土地の歴史、避難場所の確認、他の災害についても学ぶ)	16
落ち着いて臨機応変に行動する	5
子どもを落ち着かせる指導法	3
教職員や地域や家族との連携を学ぶ	2
子どもの命を優先に考えること	1
体調管理と体力作り	1
精神力	1
子どもへのアフターケアを学ぶ	1

5. まとめ

本稿の目的は、災害時にも有効な教員や保育士の資質能力について明らかにすることであった。1年次生はまさに被災直後の時点から、4年次生は過去を学ぶことを通して資質能力を見出した。表 2,5,6 を参考に二つの時点から、また二つの巨大地震の学びから捉えられた具体的な資質能力をまとめると次の通りとなった。

① 教員・保育士個人としての資質能力

これは、日常から個々の職務において自覚して高めていくことができると考えられる。

㉞自ら道を切り開くための体力・忍耐力・冷静さをもつ

㉟子どもとの信頼関係が安定している

㊱子どもの変化に気付く細やかな観察力と確かな指導力をもつ

㊲思いやりのあるあたたかい助言ができる

㊳心のケア(ストレスケア)を学んでいる

② 組織の一員としての資質能力

これは、OJT や日常のコミュニケーションによって高められると考えられる。

㉟教職員全員とともに同じレベルで共通理解できる

㊴団結、協力ができる

㊵地域と連携し、信頼を保つことができる

さらに、①②共通として㉟過去の災害と対応について学び、あらゆる機会を捉えて保育や教育に生かす、㉟定期的に地域の特性を踏まえた訓練を充実させ、備えを整備する、ことも明らかにになった。

6. 今後の課題

4年次生の研修を通じた学びからは、災害後の教員や保育士の具体的な姿が分からなかった。当時の教員や保育士同士の語りや研修においては受け継がれているのだが、公表されることが少なかった。熊本地震後の EARTH の派遣のように、被災地の教育現場の最前線でありながらボランティアよりもひっそりとその激務の詳細は知られることが少ないものなのだろう。そのような意味で、1年次生の調査で見出した資質能力や、4年次生の過去を詳しく知る体験や気付きを生かしていく両方の取り組みが大切である。4年次生のデータについては、不足しており今後さらに対象を増やして具体的な資料を得る必要がある。

今回の調査においては、教員と保育士の両方の職務に着目したが、災害発生後のそれぞれの職務について今後詳しく調査をしたい。避難所となった学校では、今までの様々な経験が蓄積され活かされているが、長時間保育が主流になりつつある幼稚園や保育所が一時的に避難所の役割を担うことが今後さらに予想される。復旧時の開園の効果や乳幼児の保育や心のケアについて調べ、被災した保護者の観点からも望まれる資質能力について明らかにする必要がある。

7. おわりに

認定子ども園の新設・改築が急ピッチで進められている。関西の幼保連携型認定子ども園 C 園では、園庭にかまどを作り、薪を常備していた。月に 1 回程度、かまどでご飯を炊き、普段から火を使って調理する昔ながらの食事を重視している。また、軒からは、細く切ったサツマイモが籠に入れて干されており、子どもたちが時々つまんで食べているとのことであった。1 本いただき、じっくりと素朴な味を楽しんだ。C 園長先生は、日本の昔の知恵と技術は保育によさとして存分に生かせることを話してくださいました。砂場を見ると、井戸の手動ポンプが低く設置されており、園児が全力でポンプを押して水をバケツに汲み上げて砂場に運んでいた。特に 3 歳児がポンプで必死に水を汲み上げたのに、バケツで受けることができず、試行錯誤していた姿が印象的であった。きっと、今夏あの 3 歳児たちは、水をバケツに溜めることの技術を学び取るだろう。そして、できるだけこぼさずに運ぶことや、力を合わせることを学ぼう。

C 園長先生はこのような施設を作った経緯を、防災の観点からと説明してくださいました。ライフラインが使えない大変さを過去の災害から学び、今も次々といろいろな場所で災害が起り安全を確信することができないことを自覚しているからこそである。そして地域の人とともに確かに存在する園でありたいからこそ、もっと工夫していきたいとのことであった。系列の D 子ども園でも、在園児の父親の協力のもと、砂場に井戸から水を汲み上げる手動ポンプを設置して、普段の遊びの段階から子どもたちが使い慣れていた。

見方を変えれば、「食育」と関連させることもできよう。しかし、C 園長の園経営の視点は ESD(持続発展教育)にも大いに関連すると考える。これから変化の大きい社会の中で、災害の多い日本では、教員や保育士にさらに高い資質能力を求めることになりがちだ。しかし、学生

が調査から具体的に見出したように日常の指導の中に、災害から学ぶ知恵や技術を潜ませていくこと、自分の周囲の人とのかかわりを大切にする、そのことが命を守る取り組みの基礎になるということを再確認することができた。

謝辞

ともに学びを進めることができた教職概論受講生、4 年ゼミ生、施設参観をさせていただいた C 園長先生、D 園長先生に、心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 1 中央教育審議会「第二次学校安全の推進に関する計画の策定について」1 頁 平成 28 年
 - 2 読売新聞東京本社『読売新聞特別縮小版熊本地震』2016 年
 - 3 文部科学省「平成 28 年熊本地震に対する文部科学省の対応について」2016 年
 - 4 MAMA - PLUG 『被災ママ 1089 人の声に学ぶ!子どもを守る防災手帳』(株)KADOKAWA 2016 年
 - 5 小原豊 谷口圭「防災教育に関する小学校教員養成課程学生の意識:国際教育協力における日本の比較優位性を前提として」鳴門教育大学国際教育協力研究第 7 号 35-40 頁 2013 年
 - 6 スポーツ・青少年局学校健康教育課「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議(第 1 回)議事録 38 頁 平成 23 年 10 月
 - 7 三浦巡「舞子高等学校における防災教育『総合的な学習の時間』における防災教育の取り組みと環境防災科の設備について」教職教育研究センター紀要 6 87-94 頁 2001 年
 - 8 内閣府(防災担当)「減災のてびき-今すぐできる 7 つの備え-」2009(平成 21)年
- i 文部科学省「1. これからの社会と教員に求められる資質能力」「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」平成 18 年
 - ii 文部科学省 学校安全参考資料「『生きる力』はぐくむ学校での安全教育」平成 22 年
 - iii 文部科学省「学校防災のための参考資料『生きる力』を育む防災教育の展開」平成 25 年
 - iv 教育再生実行会議「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」(第七次提言)平成 27 年